

『雲門録』附録の基礎的研究

水野 実・小池 直・中嶋 諒 編

附録

附録先生書四。前二書辛卯夏、同改正雲門録寄至者。第三書丁酉夏、賈司訓同研幾録寄。第四書亦是夏、盧抑齋寄。丙午歲、潤官南城。同年成井居寄圖書質疑至、未有書。於乎先生惓惓之意至矣。潤能無負乎。

〔訓読〕

先生の書 四を附録す。前の二書は辛卯夏、雲門録を改正せると同じくして寄せ至る者なり。第三書は丁酉夏、賈司訓 研幾録と同じくして寄す。第四書も亦た是れ夏、盧抑齋 寄す。丙午の歲、潤 南城に官たり、同年 成井居 圖書質疑を寄せ至るも、未だ書有らず。於乎、先生 惓惓の意 至れり。潤能く負ふこと無からんや。

〔語釈〕

○辛卯 嘉靖十年（一五三一）。『雲門録』編纂の翌年にあたる。

○丁酉 嘉靖十六年（一五三七）。『研幾録』編纂の翌々年にあたる。

○賈司訓 未詳。程文徳（一四九六～一五五九）『程文恭遺稿』に「送賈司訓」がある。

○研幾録 薛侃の書。その序に「嘉靖乙未（十四年、一五三五）冬日南至、門人鄭三極謹書」とある。

○盧抑齋 未詳。明末の医師・薛巳の医書『薛氏医案』等に「職方盧抑齋」としてその名が見える。

○丙午 嘉靖二五年（一五四六）。『凶書質疑』編纂の翌々年にあたる。

○南城 現在の江西省撫州市南城県。侃潤は嘉靖二三年（一五四四）に進士となり、南城令に任ぜられた。

○成井居 羅洪先『念庵文集』卷三に「答成井居」がある。また同卷五「夏遊記」の記述から、嘉靖二七年

（一五四八）六月時点では玉峽（現江西省吉安市峽江県南部）の「邑令」であったことがわかる。

○圖書質疑 薛侃の書。その冒頭「凶書質疑引」には「嘉靖甲辰（二三年、一五四四）夏寓羅浮西湖中離薛侃謹識」とある。薛侃は嘉靖十五年（一五三六）より江西・浙江を旅した後、現広東省惠州市の羅浮山に入り、同市の西湖湖畔にある永福寺にて学を講じ、嘉靖二四年（一五四五）に帰郷した。

【一】

*本書簡は『雲門録』にのみ収める。

與潤書曰。一會晤、見沈潛縝密、已知爲載道之器。不謂別來遂能體會諸心、遂將經耳紀錄得起。雖吾言之未盡、路徑即此路徑、誠於是存存不息、推擴將去、又便日見一日、即如一段幽雅去處。但肯走來者、無不稱美、無不喜憚。若能時常處其中、神氣日清。處之又久久而不移、便與之渾化。離此不得、往他處亦不得矣。彼不肯一來者、安知此趣。而或來或去者、又安能眞得其趣哉。此學不明、雖有宋時諸儒、實自三代之後未嘗

大明也。此生不再、百年有期。隨俗習非、與時汨沒、沈埋章句、終歸名利、大丈夫寧如是乎。根器志向如吾伯雨、亦天所厚者也。幸毋蹉過、擔當精進、朴朴實實、從根源處立起、從隱微處洗淨、從機括處握住、當能一日千里矣。所不能者、只爲此志未歸一耳。勉之勉之。任重致遠、舍君其誰。原錄命舍弟略定過付去、姑依此用功。他日相見、尚有商量處。不一不一。

〔訓読〕

潤に与ふる書に曰ふ。一たび会晤し、沈潜縝密なるを見て、已に載道の器爲るを知る。謂はざりき別來遂に能く諸を心に体会し、逐ひて將て耳を経て紀錄（得起）せんとは。吾が言の未だ尽さざると雖も、路径は即ち此の路径なり。誠に是に於て存存として息まず、推拈し將て去けば、又た便ち日に一日を見ること、即ち一段の幽雅なる去処の如し。但だ走来するを肯んずる者は、称美せざるもの無く、喜憚せざるもの無し。若し能く時に常に其の中に処れば、神氣日に清し。之に処ること又た久久にして移らざれば、便ち之と渾化す。此を離れ得ず、他処に往くも亦た得ざらん。彼の一來を肯んぜざる者は、安んぞ此の趣を知らん。而も或は来り或は去る者、又た安んぞ能く真に其の趣を得んや。此の学明らかならず、宋時の諸儒有りとなし。も、実に三代自りの後未だ嘗て大に明らかならざるなり。此の生再びならず、百年期有り。俗に随ひ非に習ひ、時と汨沒し、章句に沈埋し、終に名利に帰するは、大丈夫寧んぞ是の如けんや。根器志向吾が伯雨の如き、亦た天の厚くする所の者なり。幸はくは蹉過すること母く、担当精進せよ。朴朴実実として、根源の処従り立起し、隱微の処従り洗淨し、機括の処従り握住すれば、当に能く一日千里たるべし。能くせざる

所の者は、只だ此の志未だ一に帰せざるが為のみ。之を勉めよ之を勉めよ。重きに任じ遠きを致すは、君を舍いて其れ誰ぞ。原録舎弟に命じて略ぼ定（過）めしめて付し去けば、姑く此に依り功を用ひよ。他日相見るに、尚ほ商量する処有らん。不一不一。

「語釈」

○載道之器 周敦頤『通書』等に見える「文所以載道也」を踏まえるか。

○逐將經耳紀錄得起 倪潤が『雲門録』を編したことを言う。

○日見一日 『伝習録』上に「人若真實切己用功不已、則於此心、天理之精微日見一日、私欲之細微亦日見

一日。若不用克己工夫、終日只是説話而已。天理終不自見、私欲亦終不自見」とある。

○即如一段幽雅去處 「去処」は去就。前註を踏まえて「天理・人欲を自覚化することで、物事への対処があざやかに行えるようになる」と解する。

○肯走來者 心に到来する外物を拒絶しないこと。外物をことさら弁別しようとする修養法について薛侃が否定的であることについては、『雲門録』第一則「潤曰、声色不当視聽、一念欲視欲聽、即是己私。言動亦然。先生曰、如此則勿視勿聽、当閉目塞耳乎。凡可聞皆声、可見皆色、可聞則不容不聽、可見則不容不視。何物是不当視聽的。……其於淫声美色之類、自能精辨、不為之蔽」等を参照。

○伯雨 倪潤の字。

*本書簡は『薛侃集』卷九「與淮上諸友」にも収める。

與諸友書曰。相聚淮上、眞所謂味如芝蘭、義均

骨肉。別後不審能時若是否。世界如許。經目觸耳、無非刀劍酖毒。觸之者輕傷重死。誰能知之。

知之者寡矣。況能必遠而避之者乎。遠而避之、必尋上此路矣、必能入此安樂園矣。見得此意、眞是爲學則此長彼消、不爲學則此消彼長。長者何。消者何。可以安身、可以立命矣。然雖有質、不可無志也。有志、不可無友也。今人求名利不遠千里。

數十年客居、人不之非、以其所見者重也。夫輕者、重見之。且如是。苟眞見其所重、又安能一日已乎。

承愛相處不久、相去且遠、無以申終始之懷。嘗與道泰州王心齋、不知嘗往相見否。倘試期迫有碍、從容必往會、然後知予言之有以也。舍姪行偶病、

燈下草草、不盡欲言。

下段にそれを掲載し、文字の異同を明らかにした。

相聚淮上、眞所謂味如芝蘭、義均

骨肉。別後不審能時若是否。世界如許。經目入耳、無非刀劍酖毒。觸之者輕傷重死。誰則知之。

知之蓋寡矣。況能必遠而避之者乎。遠而避之、必尋此路矣、必能入此安樂園矣。見得此意、眞是爲學則此長彼消、不爲學則此消彼長。長者何。消者何。可以安身、可以立命矣。然雖有質、不可無志也。有志、不可無友也。今人求名利不遠千里。

數十年客居、人不之非、以其所見者重也。夫輕者、重見之者且如是。苟眞見其所重、又安能一日已乎。

承愛相處不久、相去且遠、無以申始終之懷。嘗與道泰州王心齋、不知嘗往相見否。倘試期逼有碍、從容必往會、然後知予言之有以也。舍姪行偶病、

燈下草草、不盡欲言。

「訓読」

諸友に与ふる書に曰ふ。淮上に相聚まる、真に所謂る味は芝蘭の如く、義は骨肉に均しきなり。別後審らかならず能く時時に是の若くなるや否や。世界は許の如し。目を経耳に触るる、刀劍酰毒に非ざるは無し。之に触るる者軽きは傷れ重きは死す。誰か能く之を知らん。之を知る者寡し。況んや能く必ず遠ざけて之を避くる者をや。遠ざけて之を避くるも、必ず此の路に尋（上）ぬれば、必ず能く此の安楽国に入らん。此の意を見（得）れば、真に是れ学を為せば則ち此れ長じ彼れ消え、学を為さざれば則ち此れ消え彼れ長ず。長ずる者は何ぞ。消ゆる者は何ぞ。以て身を安んずべく、以て命を立つべし。然るに質有りと雖も、志無かるべからざるなり。志有るも、友無かるべからざるなり。今人名利を求めて千里を遠しとせず。数十年客居するも、人之を非とせざるは、其の見る所の者重きを以てなり。夫の軽んずる者は、重く之を見るもの且く是の如くす。苟も真に其の重んずる所を見れば、又た安んぞ能く一日も已まんや。承る相処ること久しからず、相去ること且つ遠く、以て終始の懐を申ぶること無きを愛しむと。嘗て与に泰州王心齋を道ふ。知らず嘗て往きて相見るや否や。倘し試期迫り碍げ有るも、従容として必ず往きて会へ。然る後予の言の以有るを知らん。舍侄行きて病に偶ふ。灯下草草たり、言はんと欲するを尽さず。

「語釈」

○相聚淮上 薛侃が淮安で倪潤と会ったのは、嘉靖九年（一五三〇）の秋（『雲門録』序）および嘉靖十年（一五三一）九月（『雲門録』後録序）である。本書簡と前書簡は嘉靖十年夏のものであるから、ここは

嘉靖九年秋のことを指す。

○味如芝蘭 『孔子家語』卷四・六本に「善人居、如入芝蘭之室。久而不聞其香、即與之化矣」とある。

○義均骨肉 杜甫「湘江宴餞裴二端公赴道州」に「義均骨肉地」とある。

○安樂園 仏教語。極樂世界のこと。『無量寿経』に「其仏世界名曰安楽」とある。

○安身・立命 仏教語。『景德伝灯録』卷十「師云、汝向什麼處安身立命」とある等を参照。この部分、仏教語を修辭に用いてはいるが、結局「安楽国」「安身立命」といった心の安定を得るには事物に即した修養以外にない、という趣旨であろう。

○今人求名利、安能一日已乎 後文で「試期」の話題に触れ、処士であった王良を紹介していることから、この部分は科挙受験者を励ます意図で述べているのであろう。

○不遠千里 『孟子』梁惠王上「孟子見梁惠王。王曰、叟不遠千里而來、亦將有利吾國乎」。

○泰州王心齋 王艮（一四八三～一五四一）。江蘇泰州の生まれ。いわゆる「王学左派」の代表の一人であり、「右派」の代表である薛侃が極めて好意的に評していることは注目に値する。

○試期 科挙の試験期日。

○舍侄 甥。

【三】

*本書簡は『薛侃集』卷九「與倪伯雨」にも収める。下段にそれを掲載し、文字の異同を明らかにした。
又與潤書曰、向接所錄論學語、知用功真切。

南歸過淮、
負啓中

匆匆遂別、抵今猶以爲恨。後聞應選入京。
僻居嶺海、無由修賀。茲因賤恙就醫江浙、與同志
有天眞之約。天眞在杭州、去淮十餘日耳、不知五六月
間能枉臨否。第恐有碍場屋。是秋想高捷、捷後不
知聚會竟何如也。常思吾伯雨質美而志切、甚易領悟、
所在斷能有立、不致落莫。然須藉師友、精明歸一、
不差所往、庶可會其有極。

萬里懷念、惟此而已。何如何如。外、山中新刻
附覽。

〔訓読〕

又た潤に与ふる書に曰ふ。向に録する所の論学の語に接し、功を用ふること真に切なるを知る。南に帰る

別後得所錄論學語、足知用功真切。
中頗失眞、恐遂執爲定説、遺悞不淺、不得已畧爲改
削封回、不審能徹覽否。南歸過淮上、冀一會、負
咎中役使不便、匆促遂行、抵今又以爲恨。後聞應
選入京、僻居嶺南、無由修賀。即因賤恙就醫江浙、
與諸同志有天眞之約。天眞在杭州、去淮十餘日、
不知五六月間能往一會否。

賢契質美而志切、

所在斷能、不致落莫。然精明歸一、沛然會極、
不差所往、必須再得師友口傳心受一番。越有王龍溪、
予畏友也、得雲門法眼、且善啓發、方告病家居、可
往一見。懷憶惟此、可代面也。何如何如。

に淮を過るも、咎を負ふの中 匆匆として別れを遂ぐるは、今に抵るも猶ほ以て恨みと為す。後に選に応じ京に入るを聞く。嶺海に僻居し、賀を修むるに由無し。茲に賤恙に因りて医に江浙に就き、同志と天真の約有り。天真 杭州に在り、淮を去ること十余日のみ。知らず 五六月の間 能く枉臨するや否や。第だ恐くは場屋に碍有らん。是の秋 想ふに高捷せん、捷するの後 知らず 聚會すること竟に何如ぞや。常に思ふ 吾が伯雨 質美にして志 切たり、甚だ領悟し易く、在る所 断じて能く立つこと有り、落莫を致さず。然れども須らく師友を藉り、精明にして一に帰し、往く所を差へざるべくんば、其の極有るに会ふに庶からん。万里懷念するは、惟だ此れのみ。何如何如。外、山中の新刻を附覽す。

「語釈」

○南歸過淮 嘉靖十年九月の再会（『雲門錄』後録序）を指す。この年、薛侃は官職を剥奪され広東揭陽に帰郷しており、その途上に淮安へ立寄ったのである。

○負啓中 『薛侃集』が「啓」を「咎」に作るのに従う。前註参照。

○僻居嶺海 「嶺海」は広東のこと。前前註参照。

○賤恙 自らの病を謙遜するという。

○就醫江浙 序の「凶書質疑」の註を参照。

○天真之約 嘉靖九年（一五三〇）、薛侃らは浙江杭州の天真山に書院を建てている。

○高捷 科挙に及第すること。結局のところ侃潤は服喪のため受験できなかつた。第四書を参照。

○山中新刻 本書簡と共に送られた『研幾録』のこと。

【四】

*本書簡は『薛侃集』卷九「孟夏念七日與倪伯雨」にも収める。下段にそれを掲載し、文字の異同を明らかにした。

又與潤書曰、頃過清江、嘗托賈司訓轉致書問、不知已徹覽否。內約天真一會、尚慮有碍。秋試、遇盧抑齋先生、乃聞在制。去遠失慰、益增懷憶。聊寄香帕引遠情。

是行諸友 擬集杭

之天目。計當數月。而龍溪、南山、碧洋諸名德俱在會、亦一盛期也。未審雅興竟何如。秋盡即須南還、一歸嶺外、信息又復難悉。知能會面邪。人生只有此事、爲是未明徹、未能實有諸己、以

故汲汲此行。點檢同志、如吾伯雨敏切精專、足可上達遠詣者、誠不多得也。恨相與不久、未盡所言。別後每切懸懸。工夫既有入處、想自有擴充、有新益。然道理無窮。會須印證一番、使此心瑩然沛然、隨處順適、而後爲有聞也。幸加自愛、及時決擇。誠非語言筆札所能悉也。

書問不知已徹覽否。內約天真一會、尚慮有碍。頃過清江、嘗托司訓轉致。秋試、即會盧抑齋先生、乃聞服未闋。去遠失慰、益增懷憶、聊寄香帕引遠情、照入、荷荷。是行諸友多集、擬聚杭之天目。計當數月。而龍溪、南山、碧洋諸名德具在、亦一盛會也。未審雅興竟何如。秋盡當南還、一歸嶺外、信息即不易悉、矧能一面耶。人生只有此事、爲是未明徹、未能有諸己、終是未有著著、以此汲汲此行。檢點同志、如吾賢契敏切精專、足可上達遠詣、誠不多得也。恨相與未久、未盡欲言。別後每懸懸。不得再。幸加自愛、及時決擇印證、使此心瑩然沛然、隨處順適、而後爲有聞也。

〔訓読〕

又た潤に与ふる書に曰ふ。頃ごろ清江を過ぐるに、嘗て賈司訓に托して書問を転致す。知らず已に徹覽するや否や。内に天真一会を約するも、尚ほ碍有るを慮る。秋試、盧抑齋先生に遇ひ、乃ち制に在るを聞く。去ること遠くして慰みを失ひ、益ます懷憶を増す。聊か香帕を寄せ遠情を引く。是の行諸友杭の天目に擬集す、計るに数月に当る。龍溪、南山、碧洋の諸名徳俱に会に在り、亦た一盛期なり。未だ審らかならず雅興、竟に何如。秋尽くれば即ち須らく南に還るべきも、一たび嶺外に帰れば、信息又た復た悉し難し。矧んや能く会面するをや。人生まれて只だ此の事有るのみ、是を為すこと未だ明徹ならざれば、未だ實に諸を己に有すること能はず。故を以て此の行に汲汲たり。同志を点検するに、吾が伯雨の如く敏切精專にして、上達遠詣すべきに足る者、誠に得ること多からざるなり。恨むらくは相与にすること久しからずして、未だ言ふ所を尽さず。別後毎に切に懸懸たり。工夫既に入る処有り、想ふに自ら拡充すること有つて、新たに益すること有らん。然れども道理窮り無し。会すべ須らく印証すること一番、此の心をして瑩然沛然として、随处に順適せしむべくして、而る後聞くこと有りとなすなり。幸はくは自愛を加へ、時に及びて決扱せよ。誠に語言筆札の能く悉す所に非ざるなり。

〔語釈〕

○清江 清江という地名は複数あるが、江西の清江県（現樟樹市）であろう。

○天真一会 前書簡「天真之約」を指す。

○在制 喪中であること。

○香帕 香りを着けた手ぬぐい。書簡とともに送ったか。

○擬集杭之天目 杭州臨安県に天目山がある。

○龍溪 王畿（一四九八～一五八三）、龍溪はその号。

○南山 未詳。

○碧洋 未詳。江汝璧（正徳一六年進士）の文集は『碧洋摘稿』と称する。

○知能會面邪 『薛侃集』が「知」を「矧」に作るのに従う。

○實有諸己 『程氏遺書』卷二上に「學者識得仁體實有諸己、只要義理栽培。如求經義、皆栽培之意」とあり、『近思錄』にも採用される。